

# 日独二言語対訳辞書総覧 序

信岡資生

## 1

日本の政府の公的教育・研究機関におけるドイツ語学習は、徳川幕府の洋学研究所であった「洋書調所」に文久2年(1862)「獨逸學科」が開設されたことから始まる。

「洋書調所」の元をたどれば、幕府が貞享元年(1684)に創設した天文・曆術・測量・地誌を司る「天文方」にあり、これが西洋地理学から西洋事情一般を扱う「浅草天文臺」(天明2年—1782)に発展、この中に西洋学術書や外交文書の翻訳を引き受ける「蠻書和解御用」という部局が文化8年(1811)に設けられ、それが拡充されて安政元年(1854)に「洋學所」として発足し、安政3年(1856)2月に「蕃書調所」となり、さらに文久2年5月「洋書調所」と改称されたものである。この改称については、「蕃」が「野蛮」の蛮に通じると欧米人から異議が出たためと言われている<sup>1)</sup>。この「洋書調所」も翌文久3年(1863)にはまたまた「開成所」と改称、幕府の大政奉還によって慶応4年(1868)一時閉鎖されたが、明治改元とともに新政府によって「開成学校」として再開され、さらに「大学南校」(明治2年—1869)からのちの「東京帝国大学」へと移行していくことになるのであるが<sup>2)</sup>、それはさておき、こうした幕末の洋学研究機関のめまぐるしいばかりの改称・拡充・再編成からは、急迫する欧米諸国からの日本に対する外交攻勢に対処しきれないでいる幕府の狼狽ぶりが窺えると言えよう。

ドイツ語学習の必要を生んだ近因は、万延元年12月14日(1861年1月24

日)にプロイセンと交わした日普修好通商条約の仮調印である。この条約の第二十一条に「<sup>プロイセン</sup>孛漏生国のデプロマチーキアгент及ひコンシュライル吏人より日本司人にいたす公事の書通は、独逸語を以て書すへし此条約施行の時より五箇年の間は日本語又は和蘭語の訳文を添ゆへし」とあり、また続く第二十二条には「此条約は日本語独逸及ひ和蘭語を以て書し各翻訳いえどもは同義同意なりと雖 和蘭訳文を以て原と見るへし」とあった<sup>3)</sup>。ペリーの浦賀湾来航(嘉永6年—1853)以来、外交はすべてオランダ語によってしのいできた幕府は、少なくとも向こう5年の間に英語のみならずドイツ語による公式外交の準備態勢を整える必要に迫られたわけである。ただし上記第二十一条の約束は幕府側にドイツ語に精通する者が少ないとの理由から、幕府は慶応3年(1867)11月15日プロイセン初代駐日公使フォン・ブランド(Max von Brandt)に書を送ってその実施の延期を求めた。ブランドは、「余は孛國と日本と條約を取結てより七年の間日本政府にて獨逸語通辯之者を仕立ることの出来へき筈なりと思はざるを得ず。且孛國と日本と取結たる條約の施行を延引することは、固より余が日本政府に許すこと能はざる所なり<sup>4)</sup>」と不満を示し善処を求めたため、江戸あるいは横浜にドイツ語稽古のための学校の設立が約束されたが、幕府の崩壊によってこれもやむやみになり、結局ドイツ語による文書の交換は行われぬまま明治を迎える結果となった。この間の経緯は、丸山國雄著「我が國に於ける獨逸學の勃興」(『日獨交通資料 第三輯』財團法人日獨文化協會 昭和11年)に詳しく述べられている(特に5～9ページ)。

付言すれば、当時の幕府にはドイツ連邦とプロイセンの関係を理解把握することは困難であって、プロイセン一國と條約を結んだのである。そのうち1967年には北ドイツ連邦が成立する一方で、幕府も徳川慶喜が大政を奉還し、結局明治2年1月10日(1869年2月20日)に明治政府と北ドイツ連邦との間に、今度は北ドイツ連邦代理公使としてのブランドが折衝した結果、日独修好通商条約が締結(9月9日批准)されたのであった<sup>5)</sup>。

すでに蕃書調所の蘭学教授市川<sup>いっ きかんのり</sup>斎宮兼恭<sup>6)</sup>は、ドイツ連邦(1815年発足)の盟主的地位にあったプロイセンが、通商条約の締結を目的として派遣した東洋遠征艦隊の旗艦アルコーナ号(Arcona)の来航とほぼ同時の、万延元年7月17日(1860年9月2日——アルコーナ号の江戸湾到着は2日後の7月19日の夜)に「獨乙學之命」を幕府から受け、続いて8月7日「獨乙國之學引請取扱、同國之辭書編纂等も致候様可申渡旨」を酒井右京亮から命じられていた<sup>7)</sup>。その2年後の文久2年2月23日には、市川に続いて、蕃書調所教授手伝出役であった加藤弘藏<sup>8)</sup>も同じ公命を受けた。両名は独逸学科の開設を建議し、これが発足したばかりの洋書調所において実現し<sup>9)</sup>、同年5月8日独逸学句読教授出役として白戸兼太郎、團源次郎が任命されたのであった<sup>10)</sup>。

元治元年(1864)11月に布告された開成所規則書改正を見ると、その中の開成所稽古規則覚書に以下の定めが見られる。

一 開成所ニおゐて稽古有之學術左之通

和蘭學 英吉利學 仏蘭西學

獨乙學 魯西亞學

天文學 地理學 數學

物産學 精煉學 器械學

画學 活字學

右諸學術之内何科ニ而も願次第

稽古相濟候事<sup>11)</sup>

山岸光宣博士の「日本に於ける獨逸語研究の沿革」は、当時のドイツ語の学習についての事情を明らかにしているが、それによれば、慶応元年(1865)の開成所の教授職に市川斎宮、教授並に加藤弘藏、教授手伝出役に團源次郎の名が、また独逸学世話心得の項には小田篠次郎、瓜生祿松

の名があるという<sup>12)</sup>。慶応2年末には、教授手伝出役に團のほか、鈴木進兵、近藤鎮三、三輪久之丞の名が加わっている<sup>13)</sup>。彼らは皆市川にドイツ語を学んだと見られる。独逸学の開拓に従事した彼らが、最も必要としたのがドイツ語の教本と、とりわけ辞書であったことは言うまでもない。彼らは、直接ドイツ人に接することができない限り、オランダ語を介して、つまり蘭独対訳辞書ないし会話書によって独習するしかなかった<sup>14)</sup>。上記のように幕府は市川・加藤に辞書の編纂を命じたが、ことは容易に成らなかった。

## 2

文久2年(1862)冬、洋書調所は『官版獨逸單語篇』を刊行した。因に洋書調所は同年『英和對譯袖珍辭書』(A POCKET DICTIONARY OF THE ENGLISH AND JAPANESE LANGUAGE)も出版している。洋書調所教授方堀 達之助が主任となり、英蘭対訳辞書と『和蘭字彙』(安政5年刊行)を利用して僅か2年の間に急いで作ったといわれているもので<sup>15)</sup>、編纂を手伝った者の中には西 周助、即ち「哲学」という訳語の創始者となった後年の西 周の名も見える。菊判953ページ、収録語数約3万5千語、初版200部はすぐに売り切れた。「初は一冊の価式兩程なりしに、英学の勃興するに随ひて、需要極めて多くなりて、後には一冊の転売拾兩乃至式拾兩にも及べり<sup>16)</sup>」というありさまで、のちに通称「開成所辞書」と呼ばれ、明治に入ってまでも広く使用された。また、洋書調所は同年『佛蘭西單語篇』<sup>17)</sup>を、続いて慶応2年には開成所が『英吉利單語篇』を出版し、「單語篇」シリーズが揃えられたことも付言しておこう。荒木伊兵衛著『日本英語學書誌』(創元社 昭和6年)では、『英吉利單語篇』の収録単語は1490語で、『佛蘭西單語篇』と比較すると、「只英語が佛蘭西語に變っているだけで語数その他は同じ」であり、「この英吉利單語篇が原書に據らずして洋書調所板の佛蘭西單語篇を英譯して作ったものかどうかは甚だ

疑問の存する所である」(178ページ)としている。

さて、『官版獨逸單語篇』を、『江戸幕府刊行物』(福井 保著 雄松堂、昭和60年、206～208ページ)によって紹介すれば、次の通りである。

洋書調所編 文久二年刊(洋書調所) 一冊

文久二年に洋書調所が同所の教科書として刊行した。我が国で刊行された最初の獨逸語研究書である。前掲『仏郎西單語篇』の姉妹篇にあたる。内容は季節・天候・飲食物・家族・風俗・學術その他、二二の項目に分類して、獨逸語の單語を冠詞と共に列挙したもので、仏蘭西語の場合と同様に、訳語や注記等は加えられていない。

和紙、和装(左開き)、整版。見返に刊記がある。題簽は双边匡郭内に「官版獨逸單語篇」と題する。

本文は四周單辺、毎頁縦二段組、横二〇行。版心に丁附があり一丁から二五丁に至る。別に毎頁上端にアラビア数字を以て頁数を刻してあって、最後は四九頁七行に終る。その頁下端に「調所」單郭黒印(縦二・一糎、横一糎)を押してある。本の大きさは縦一八・二糎、横一二・五糎である。

同書207ページには見返・巻頭の写真図が添えてあるが、「静岡県立葵文庫蔵書之印」が押してあるのがわかる。

『官版獨逸單語篇』については、他にも田中梅吉氏(『総合詳説日獨言語文化交流史大年表』三修社、1968)や、宮永 孝氏(『日独文化人物交流史ドイツ語事始め』三修社、1993)による解説があり、また1995年5月13日立教大学で開催された「日本独文学会1995年度春季研究発表会」でのシンポジウム「Ⅱ. 幕末・明治期におけるドイツ語の受容」(Deutsche Sprache im Japan des 19. Jahrhunderts)の「1. ドイツ語学習の始まり」で、高橋輝和氏がこの書について報告している。筆者もその現存する一冊

を静岡県立中央図書館で閲覧・検分した。福井氏、田中氏らの検分したのと同じものである。ところどころに虫食いが見られるが、ページを繰るには支障はない。閲覧は職員の目の届く所定のテーブルでのみ許されるが、写真撮影やコピーはできなかった。黄色の和綴じ表紙で、筆者の測定では縦18cm、横12.3cm、和紙両面木版刷り25葉の簡素な本で、上記『英和對譯袖珍辭書』が輸入モロッコ革表紙の立派な装丁で、「和本と違って本を立てることができ、黒い、その姿が、当時の木枕の台に似ていたので、“枕辭書”と呼ばれた」<sup>18)</sup>と聞くのとは雲泥の差と言えよう。惣郷正明氏によれば、洋書調所は同時平行して『英和對譯袖珍辭書』の印刷に追われていたため、活字が使えず、『獨逸單語篇』を筆記体のまま木版に彫って印刷した（「辭書をめぐる人びと(10) 明治維新後に高まったドイツ語学習」三省堂『ぶっくれっと』1985 所載）とのことであるが、両書の装丁の差もそうした事情によるものかもしれない。扉ページは縦に三つに仕切られ、右の欄に上から「文久壬戌之冬刻成」、中央の大きな仕切りに「官版獨逸單語篇」（官版の二字は小さく右から横書き）、左の欄には中程から「洋書調所」と縦に記されている。編者の名前は記されていないが、市川斎宮が中心となって、当時洋書調所でドイツ語の勉強に携わっていた上記の加藤弘蔵、白戸兼太郎らが編纂に加わったと想像される。本文は各ページが縦左右2欄に仕切られ、各欄は左側にドイツ單語が筆記体で記され（高橋氏は「木版の文字は確かに市川の筆跡だ」<sup>19)</sup>と断定している）、その訳語が楷書体の日本語で右側に朱書されている。つまり訳語は学習者が書き込むようにできている、いわば教本あるいは学習帳である。單語はそのほとんどが名詞で、定冠詞もしくは不定冠詞が付けられて頭字は大文字になっているが、綴りの終わりにピリオドが打たれていたりいなかったりで一定していない。各欄20語、1語ごとに横仕切りが入る。49ページあるから、約2千語を収めていることになる（宮永氏によれば1789語、高橋氏によれば1712項目）。單語は事項別に分類されていて、第1ページから順に挙げると

Von der Welt und den Elementen ; Von der Zeit und der Jahrzeiten ;  
 Vom Essen und Trinken ; Von der Blutsverwandschaft ; Vom  
 Menschen und dessen Theilen ; Von den Zufällen der Krankheiten  
 und Mängeln des Menschen ; Von Gewerben und Handwerken ; Von  
 Manns und Frauen-\* Kleidern ; Vom Studieren und der Schreiberei ;  
 Von den Theilen des Hauses, und vom Hausrath ; Was man in der  
 Küche und in dem Keller findet ; …

\* 綴りなどに誤りが見受けられるが、すべて原文のまま。

といったぐあいに続いて、全部で22項目ある。

例として3ページ目の記載を全部挙げてみると次の通りである。

die Stunde.	時	der Sonnen Aufgang	日出事
der Neujahrstag	元日	der Sonnen Untergang	日没事
die Jahrszeit	季候	• das Anbrechen des Tages.	
die Morgenzeit	暁方	der gestrige Tag	昨日
die Abendzeit	晩方	der heutige Tag	今日
• die Morgenröthe.		der morgende Tag	明日
• die Abendröthe.			
Vom Essen und Trinken.			
• das Brot	麵包	eine Fleischbrühe	肉汁
der Wein	酒	der Nachttisch.	
das Bier.	麥酒	der Käse.	
das Fleisch.	肉	der Tisch.	飯臺
der Fisch.	魚	das Tischtuch.	
Gesottenes.	煮肉	ein Tellertuch	
Gebratens.	焙肉	ein Stuhl.	椅子
• eine Pastete.		ein Messer.	小刀
eine Suppe.	羹	ein Gabel.	
die Brühe.	掛汁	ein Löffel.	

第1, 2ページの単語にはすべて訳語の書き込みが見られるが, 3ページ目になると訳語の書き込みのない語もある。ドイツ語の頭に朱点 (das Anbrechen des Tages) や墨点 (die Morgenröthe, die Abendröthe, eine Pastete) が打たれた語があって, 本書によって学習した生徒の姿が想像される。ein Löffel (Löffel の誤植か?) の右側には判読に苦しむ乱れた書き込み文字がある。誤植の r を訂正した L の筆記体のようにも見えるが, 宮永氏がこれを「七」と解説しているのが正しいと思われる。訳語の書き入れは4ページ目のはじめの三語 ein Teller「俎板」, eine Schüssel「塩桶」, ein Salzfaß「手燭」を最後に, 四語目の ein Leuchter 以下の語には書き込みがない。「塩桶」「手燭」の書き込みは, 誤って一語ずつずれたものであろう。

上述のように, 収録されている単語はほとんど名詞であるが, 末尾の戦争用語の項目で, entwaffnen, plündern や, sich auf Gnad und Ungnad ergeben, auf die Wacht ziehen, mit Sturm erobern, den Ort zur Uebergabe zwingen といった慣用句も10語ばかり挙げられている。

この『官版獨逸単語篇』は早稲田大学中央図書館にも一部保存されていて, 高橋氏がシンポジウムで配布した資料コピーによれば, その中に書き込まれた訳語には, 当然のことながら静岡県立中央図書館の保存のものとの相違が見られる。上に掲げた3ページの中からそれらを拾うと, 例えば, der Sonnen Aufgang「日ノ登ル事」, der Sonnen Untergang「日ノ下ル事」, das Brot「飯」, eine Suppe「吸物」となっているし, 訳語の欠けた語にも, das Anbrechen des Tages「夜ノ曉ル事」, die Morgenröthe「晨」, die Abendröthe「黄昏」, der Nachtschisch「二ノ膳」, der Käse「乾酪」, das Tischtuch「膳布キン」, das Tellertuch「食時ニ用ユル手ヌグイ」, eine Pastete「食物ノ名」などと訳語が書き込まれているのがわかる。ein Gabel の訳語は「カナバシ」と読める。ein Löffel の書き込み文字はここでも判読できない。なお高橋氏は, 市川はプロイセン使節団の団員



ブンゼン (Theodor von Bunsen) からドイツ語を学んだとされているが、この書でも「一月」の Jänner や、「二月」の Hornung など、南ドイツの語形が多いのは、ブンゼンがオーストリアのドイツ語を話したという幕府の記録と符合することを指摘している<sup>20)</sup>。

いずれにせよ、『官版獨逸單語篇』を日本における独和辞典の嚆矢と呼ぶにはやはり躊躇せざるをえない。むしろ、教科書あるいは単語集に入るものであると言えよう。

### 3

ドイツ語対訳の単語集としては『官版獨逸單語篇』が最初ではない。それ以前に『佛英獨三語便覧』が出版されている。現在国立国会図書館の古典籍資料室に残存しているものは、筆者の測定で縦25.5cm、横18cmの和綴じ(袋綴じ)で、黄色の表紙に『村上松翁撰 村上義徳校 佛英獨三語便覧 再刻 達理堂藏』と印刷されている。初巻(六一枚)、中巻(六三枚)、終巻(六二枚)の3冊から成る。

撰者の村上松翁は、通称を英俊といい、幕末から明治にかけての語学者・科学者である<sup>21)</sup>。彼は諸外国語に通じていたが、特にわが国におけるフランス語学習の開祖とされている人物で、明治18年(1885)フランス政府からその功績によりレジオン・ドヌール・シュバリエ (Chevalier de l'ordre national de la légion d'honneur) 勲章を贈られている。文化8年(1811)下野国(栃木県)那須野佐久山の医師の家に生まれ、名は義茂、幼名を貞介といった。初め漢学を、次いで医学と蘭学を学んで、松代藩の藩医となり、同藩の佐久間象山に勧められてフランス語の学習を始め<sup>22)</sup>、その学力を買われて安政5年(1858)蕃書調所の教授方に採用され、翻訳掛も務めた。先に引用した開成所稽古規則の中に「此度出役御差免可相成者」として

御手当

一式拾人扶持  
金拾五両

真田信濃守家来  
開成所教授手伝出役

村上英俊  
寅歳五十六

右之者儀外国方翻訳御用兼勤致居候に付教導向為引請候訳ニも参兼彼是御不都合之廉も有之候間此度開成所之方者御差免相成候様仕度奉存候

と記されている。

彼はフランス語の辞書の刊行を調所に頼んだが、英和辞書の刊行に取りかかっていた幕府にはその余裕なく、英俊はついに自力で元治元年（1864）に『佛語明要』（4巻 380丁 3万5千語）を刊行した。

さて、筆者の見た国立国会図書館所蔵の『佛英獨三語便覧』では、初巻の冒頭に掲げられている鹽谷宕陰世弘<sup>23)</sup>の「三語便覧引」の日付が「嘉永七年甲寅良月」、また続く小林畏堂至静<sup>24)</sup>の「三語便覧序」の日付も「嘉永甲寅孟冬」となっている。嘉永7年（1854）は11月27日に「安政」と改元された年であるが、「良月」「孟冬」は共に陰暦10月のことである。この日付を、多くの事典や年鑑が『三語便覧』刊行の年と誤って受け取っているが、後に引用する藤田東一郎氏の研究で明らかのように、これらの序文は初版から付けられたのではないようである。

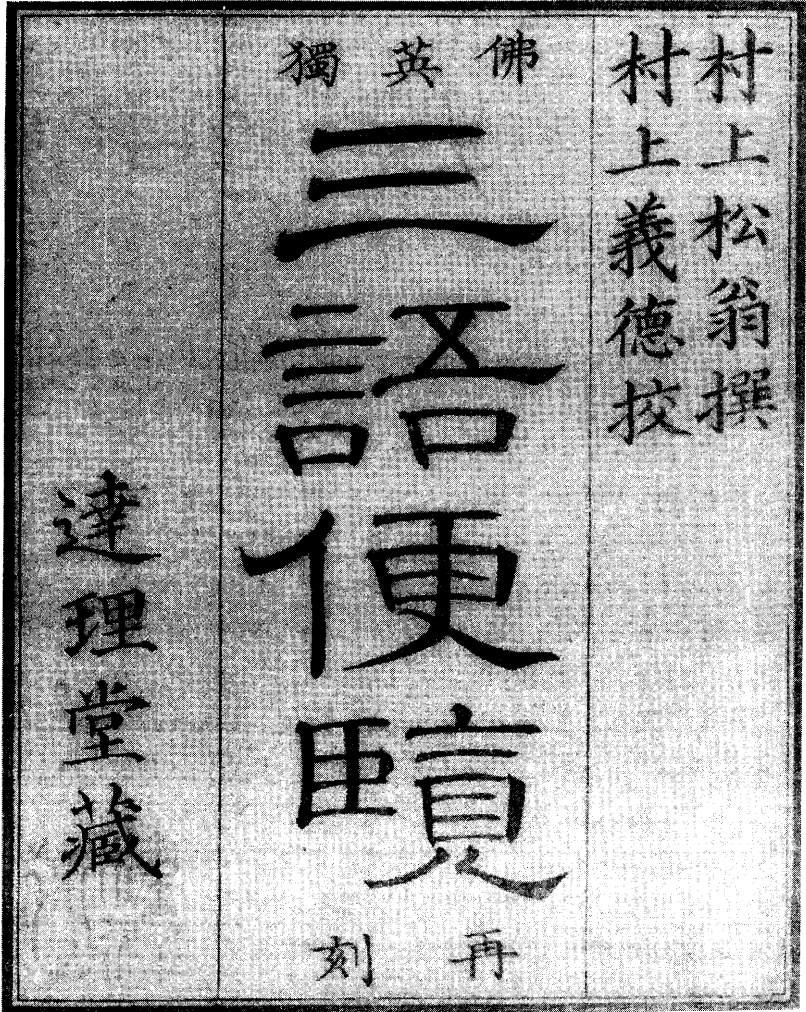
鹽谷宕陰の「三語便覧引」の要旨は、清国が異国語を軽んじたため、英国に広州を侵されたとし、異国のことばを学ぶのは国防の急務であるとの観点から本書の意義を説いている（文中の振り仮名は筆者）。

……且つ英と佛とは外は和にして内實は相忌む。皆洋夷<sup>ゆう</sup>の尤狡なる者なり。而して蘭は其<sup>りんび</sup>の隣比に居して我と旧好を為す。國家若し英に事有らば亦た必ず佛に事有り。佛に事有らば亦た必ず英に事有り。其の時に方<sup>あた</sup>りて、蘭豈に郭夷の清に於けるが如きこと無からんや。則ち此の三邦の語に通ずること亦た辺備の要務なり。必ず欠くべからざるなり。……

今洋夷皆我が敵なり。其の情を審かにせんと欲して其の語通ぜざれば悪くんぞ可ならん。(本書を)誦めし者默然たり。蓋し棟梁此の書を著すは専ら辺防の用に供するに非ざるなり。然るに洋文を解せざる吾曹のごとき者に在りては其の用を為す猶お是の如く其れ切なり。況んや洋學専門の士を於いてをや。棟梁序を請うに及び、前言を理めて諸を簡首に引す。

棟梁とは撰者村上英俊の字である。続く小林至静の「三語便覧序」を読んでみる。

本藩医官村上英俊才学を嗜む。日頃著す所の三語便覧を携え来りて余に眎して曰く、「刀圭の餘暇茲に小冊を成す。題一言を請う」と。受けて之を読むに荷蘭及び暎拂三國の語なり。其の切を日用に採りて之に邦語を対照す。用力の勤なりと謂う可し。……今や西洋諸蠻互市を廣め疆域を恢めるを以て務と為す。乃ち我を窺い以て其の欲を盈さんと欲す。故に屢來りて薪水を乞う。或いは漂民を送致して信を示す。是れ其の意實に測るべからず。則ち其の情亦た審らかならざるべからず。凡そ事情を知るは必ず其の書を読むに在り。其の書を読むは其の字を學ぶに在り。之を學んで此に至る。亦た時勢の宜爾たり。若し夫れ大海の中星羅雲布の洲、國其の俗を異にし、又其の語を殊にす。奚くんぞ翹茲に三國のみならんや。然りと雖も余嘗て之を聞く。我と漢外を除き大抵横文の國なり。其の語大同小異なり。就中三國の語、所謂羅甸獨逸及び斯刺勿泥亜語は多きに居る。故に損益取捨して之を施し諸蠻にして通ぜざる者なし。況んや彼の諸蠻既已に我が字を読みて我が事を解す。則ち我亦た彼を知らずべからざるなり。是れ英俊の此の著有る所以なるか。余竊かに世人に謂う。「須く聖賢の書を読み而る後蠻書を學ぶべし。若し然らざれば必ず異端に陥り、妖教に惑う者有り」と。英俊好みて漢籍を読み而て蠻書に及ぶ。宜しく其の著書の世に適して用うべし。刻竣。聊か所見を



『三語便覽』表紙（国会図書館所蔵）

亦不可不知彼也。是英俊所以有此著也。  
歟。余竊謂世人須讀聖賢之書。而後學變  
書。若不然。必有陷異端惑妖教者矣。英俊  
好讀漢籍。而及變書。宜其著書之適世用  
也。刻竣。聊書所見以弁之。

嘉永甲寅孟冬畏堂小林至靜識

澤俊卿書



	動語		佛蘭西語	英傑列語	獨逸語
下 <small>アラス</small>	<i>abaisser.</i>		<i>to let down.</i>	<i>unterlassen.</i>	
廢棄 <small>アラス</small>	<i>abandonner.</i>		<i>to leave.</i>	<i>unterlassen.</i>	
變性 <small>アラス</small>	<i>abattre.</i>		<i>to degenerate.</i>	<i>und achten.</i>	
嫌 <small>アラス</small>	<i>abhorret.</i>		<i>to detest.</i>	<i>acceptirten.</i>	
溢流 <small>アラス</small>	<i>aborder.</i>		<i>to flow to.</i>	<i>zu fließen.</i>	
給暇 <small>アラス</small>	<i>abaisser.</i>		<i>to diminish.</i>	<i>abstarben.</i>	
渝盟 <small>アラス</small>	<i>adjuice.</i>		<i>to adjure.</i>	<i>abthürmen.</i>	
吠 <small>アラス</small>	<i>aboyer.</i>		<i>to bark.</i>	<i>blaffen.</i>	

書して以て之を弁ず。

至静は宕陰ほどではないが、やはり英佛のわが国への接近の真意を疑い、異国の事情を知るにはその言語に通じるに至くはなし、との観点から本書を推薦している。当時の人々が洋学にかける期待の一端が窺えよう<sup>25)</sup>。

この二つの序文から判るように、この書名の「三語」とは、「荷蘭（オランダ）及び暎拂」であって、当初は蘭語であったのが、のちになって独逸語に差し替えられたのであるが、「再刻」の年は不明である。

佛英蘭と佛英獨の『三語便覧』については、藤田東一郎氏の詳しい研究「村上英俊の異った三語便覧と佛英獨三語便覧に就て」<sup>26)</sup>がある。それによると、佛英蘭の『三語便覧』には、見返しが赤・青・灰色の三種があるが、その内容はすべて等しい。藤田氏は、まず豊田 実博士の『日本英學史の研究』を引用して、奥付が安政三丙辰年正月のものと安政四丁巳五月のもの二種類あること、また異本としてそれらと同じ装綴・内容で、嘉永七年甲寅良月宕陰鹽谷世弘の「三語便覧引」、嘉永甲寅孟冬畏堂小林至静の「三語便覧序」の付いた発行年代のない奥付のものがあることを述べている。これらの発行書林は、江戸日本橋通二丁目 山城屋左兵衛、同浅草茅町二丁目 須原屋伊八であるが、最後に挙げた異本だけはさらに同芝神明前 和泉屋吉兵衛と岡田屋嘉七が加えられている。そうしてこの他になお佛英獨の『三語便覧』があるのである。

藤田氏の見た『佛英獨三語便覧』は、小林至静の「序」の

本藩醫官村上英俊。有才嗜學。頃日携所著三語便覧。來眎余曰。

刀圭餘暇成茲小冊。請題一言。受而讀之。荷蘭及暎拂三國之語。

から荷蘭という二字を消して毛筆で獨逸と訂正してある、というから、筆者の見たものとは明らかに異なるが、『佛英獨三語便覧』の発刊年代につい

ての藤田氏の推測は以下のようである。

単語の出ている最初の頁に、「佛英蘭」のほうでは

松代 茂亭村上義茂著

とあるのが、「佛英獨」の本では

日本 村上松翁撰  
村上義徳校

となっている。松代が日本と変わったのは英俊の名声が高まったからである。村上義徳は英俊の子で、栄太郎といい、英佛語に通じてのちに横浜で通訳をしていた人である。英俊は元治元年（1864）に『佛語明要』4巻を著わしたが、このときは54歳で、まだ松翁を名乗っていない。慶応3年（1867）に刊行した『佛蘭西答屈智幾』でも松翁の文字は見られない。この年57歳の英俊は「致仕深川猿江街に退隠」しているから、年齢に相応しい「松翁」を名乗るのはこれ以降のことであろう。一方、義徳は嘉永4年（1851）の生まれであるからこの年には17歳になっていて、父の仕事の手伝いはできたと思われる。そこで藤田氏は、「隠居の事実と子の年齢の歩み寄ったこの年」慶応3年を『佛英獨三語便覧』発刊の年代であると提唱するのである。

山岸光宣博士は、「日本に於ける獨逸語研究の沿革」（帝國學士院『研究報告』昭和十二年度）の中で、「前年度の報告に於て、文久二年洋書調所編の官版獨逸單語篇を以て我が國最初の獨逸語學書としたが、これより先きに出たと思はれるものに、村上英俊の佛英獨三語便覧全三巻のあることが明かになった。これは普通の三語便覧が佛英蘭の三語なると異ったもので、巻頭の引と序によれば嘉永七年の編纂のように思はれるが、これは普



通の三語便覧のものを流用したものであるから、これによって年代を決定することは出来ない。しかしその獨逸語に誤謬の多いのを見ると、文久二年の官版獨逸單語篇以前のものかと思はれる」と述べている。また上村直己氏は「日本における独和辞書発達小史」（『熊本大学教養部紀要外国語・外国文学編』第24号 1989, 2ページ）で、村上英俊は『三国便覧』を嘉永7年（1854）に刊行し、「後に慶応3年（1867）頃、オランダ語の代わりにドイツ語を入れた別本『仏英獨三国便覧』を出した」としているが、慶応3年とする根拠は示していない。

大植四郎編『明治過去帳——物故人名辞典』（東京美術刊 昭和10年）によれば、英俊は「配鈴木氏，男義徳俱に先没し甥秀太郎を養嗣と為す」とあり、『大日本人名辭書』（講談社 昭和49年）にも、「室は鈴木氏，名は兼，越後高田の人，松代に在りて娶る所なり明治五年八月を以て歿す一男あり榮太郎といふ明治十六年十月を以て歿す」とある。「佛英獨」の『三語便覧』の校閲は、息子の名を借りて実際は外国語の才能のあった英俊自身か、もしくは彼の弟子が果たした仕事であるのかもしれない。英俊は明治に入って『佛英獨三國會話』を著しているから<sup>27)</sup>、彼はドイツ語にも精通していたとも思えるからである。蘭を獨に差し替えた再版の『三語便覧』は、「引」も「序」もそのまま流用して慶応3年以後に刊行されたとする藤田氏の推測は妥当であろうが、ただ「達理堂」は、『松代町史 下巻』によれば、英俊が明治元年に開いたフランス語教授の私塾（門弟の中からのちに中江兆民が出ている）であることを考え合わせると、もう一、二年あと、明治に入ってからのことと思いたい。鈴木重貞著『ドイツ語の伝来』（教育出版センター 昭和50年）の238～239ページには、『新刻書目便覧』による明治元年から同7年に至る間、東京で出版されたドイツ語教科書が掲げられているが、その中に「三語便覧 英獨佛 村上松翁 一圓 三[部]」が見出される。

『佛英獨三語便覧』の目録は下記の通りで、項目別に単語を集めている。

初巻		
天文	地理	身體
疾病	家倫	官職
人品	官室	飲食
衣服	器用	
中巻		
兵語	時令	神佛
徳不徳	禽獸	魚蟲
草木	果實	金石
醫藥	采色	數量
地名		
終巻		
言語		
陪名詞	附詞	前置詞
附合詞	動詞	

初巻の第1ページと3ページを掲げれば下記のようなのである。

1 ページ

三語便覧初巻			
—— 日本 —— 村上松翁撰 —— 村上義徳校			
天文			
	佛蘭西語	英吉利語	濁逸語
<small>テンチノハジメ</small> 天地既成	chaos.	chaos.	chaos.
<small>モノ</small> 物	matiere.	stuff.	stoff.
<small>シゼン</small> 自然	nature.	nature.	natur.
<small>ゼンセカイ</small> 全世界	univers.	universe.	welt.

マロイホノ 惑星	planete.	planet.	dwaalster.
アマノカワ 銀河	voie lacte.	milky way	milchstrasse.
ノウク 蝕	eclipse.	eclipse.	verdunkelung.
ヒ 太陽	soleil.	sun.	sonne.
ヒノヒカリ 日光	rayons du'soleil.	ream of the sun.	sonnestrahl.
ツキ 月	lune.	moon.	mond.
ハンゲツ 半月	demi lune.	halve moon.	halb-mond.
マンゲツ 満月	pleine lune.	full moon.	volle mond.
ニジ 虹	arc-in-ciel.	rain-bow.	regenbogen.
ユウヤケ 晚霞	aurore-boreale.	north light.	nord.

また附合詞（現在の接続詞に相当する）のページを見ると

	佛蘭西語	英傑列語	獨逸語
ノチ 後	apres que.	after that.	nachdas.
カワリ 代	au lieu que.	in stead of.	in statt das.
イカントナレバ 如何則	car.	for.	weil.
オナシク 同	comme.	like, as.	gleich, als.
	d abord que,	as soon.	sobald als.
	des que.		
オリトクク 遠於	de plus.	further.	weiter.
ソノノチ 爾後	depuis que.	since that.	seit dem.

惣郷正明編『目で見える明治の辞書』（辞典協会発行 1989）の24ページに掲載されている『佛英蘭三語便覧』の第1ページは次のようである。

三語便覧初巻			
松代 茂亭村上義茂著			
天文			
	フランスコトバ 佛蘭西語	エゲレスコトバ 英傑列語	オランダコトバ 和蘭語
テンチノヘンメイ 天地既成	クラオス chaos	クラオス chaos	メンゲルロムブ mengelklomp
モノ 物	マチエ matiere	スチーフ Stuff	ストップヘ Stoffe
シゼン 自然	ナチュレ nature	ナチュレ nature	ナチュール natuur
ゼンセカイ 全世界	ユニベルス univers	ユニベルセ universe	ヘルアル hulal

1 ページを比較する限り、再版に際しては、オランダ語をドイツ語に差し替え、単語の振り仮名を削除したにとどまるようである。振り仮名発音を付けなかったのは、英俊に（もしくは義徳に）ドイツ語発音についての自信がなかったからかもしれない。

『三語便覧』は『官版獨逸單語篇』とは逆に、日本語を掲げてそれに対応する仏・英・独語（あるいはオランダ語）を挙げている。日本語は楷書にカタカナの振り仮名、欧文は筆記（草書）体で書かれている。袋綴じで1枚（2ページ）20語であるから、全部で日本語3千5百（惣郷正明氏の『洋語辞書事始』によれば三千四百——因にここでは刊行年を嘉永7年とし、「英語、フランス語が木版とはいえ、刊本に載った最初である」としている）、『目で見る明治の辞書』によれば3,375語、『國史大辭典』（吉川弘文館 昭和60年）によれば三千三百七十余語に対応する仏・英・独語（あるいはオランダ語）を収録していることになる。『官版獨逸單語篇』がほとんど名詞に終始しているのに比べ、『三語便覧』では、特に終巻で、他の品詞も取り上げ、不完全ながら品詞別分類も試みている点、辞書に一步近づいていたと言えよう。ただ、山岸光宣博士の指摘するように、綴りにも意味にも誤りが多い。筆記体のせいもあって大文字と小文字の区別がはっきりしない（特に S と s）。ドイツ語についての誤りの例を挙げてみる。

アツサ 暑	würme	ニウヤケ 晚霞	nord
イクサノケイコ 練兵	geschichtschlag	ツ、イテ 陸續	während
ミナ 皆	so viel als	スタナクモ 少亦	wie wenigook
ハナハダラ、キ 甚多	viel mehr	アガムク 欺	missbrauchen
トモナウ 相伴	beglieten	ウバウ 定奪	bestellen
サヅクル 授	anbeten		

この中の「甚多」の viel mehr について言えば、フランス語を bien plus, 英語を much more としていて、明らかに 2 語に分けて綴っている限りでは、誤りではない。vielmehr は後述する『獨逸文典字類』(明治 4 年)の「Vielmehr 今一度夫レ丈ケ」は論外としても、明治以後刊行された主な独和辞典では以下のように記述されている。

『増訂獨和辭彙 第三版』(後学堂 明治20年): *adv.* 尚多ク。○寧ろ。

却テ。反對ニ。之ニ反シテ。○況ンヤ

『袖珍獨和新辭林』(三省堂 明治29年): *adv.* 尚ホ多ク。

『新式獨和大辭典』(大倉書店 明治45年): *adv.* vgl. viel 1; (im Gegenteil) 反對に, 寧ろ:

『雙解獨和大辭典』(南江堂 昭和 2 年): *adv.* ① (vielmehr) 遙に多く。

② (im Gegenteil) 寧ろ, 却って, 之に反して, 反對に。

『大獨日辭典』(大倉書店 昭和 8 年): *adv.* 遙かに多く。(im Gegenteil) 反對に, 寧ろ, 却って, 元に反して。

『木村・相良獨和辭典』(博文館 昭和15年): *adv.* 却て, 寧ろ, それどころか, 反對に; er ist ein begabter, ~ genialer Mensch. 彼は才人と言ふよりは天才だ。

これらを見る限り, vielmehr と viel mehr の区別をはっきりつけた辞書の

出現は、佐藤通次著『獨和言林』（白水社 昭和11年）が最初である。

*vielmehr adv.* むしろ、かえって（それどころか、これに反して）：*er ist nicht dumm, weiß ~ alles.* 彼は愚かなどころか何もかも心得ている。☞但し：*er weiß viel méhr als du.* 彼は君よりも遥かに多くを知っている。

これに続いて『岩波獨和辞典』（岩波書店 昭和28年）、『木村・相良独和辞典 改訂版』（博友社 昭和38年）、『標音独和 改訂版』（三修社 昭和41年）が、『獨和言林』の表記に倣った。*vielmehr* と *viel mehr* の区別が『三語便覧』で明瞭でないのは無理からぬことである。因に、明治の多くの独和辞書がその原典として挙げる *Chr. Wenig's Handwörterbuch der deutschen Sprache, mit Bezeichnung der Aussprache und Betonung, nebst Angabe der nächsten sinnverwandten und der gebräuchlichsten Fremdwörter und Eigennamen. Köln, 1876.* を繙いて見ると

*Vielmehr*, 1) *U. w.* (= *Umstandswort*), zuweilen für *mehr*; 2) *Bdw.* (= *Bindewort*), *uneig.* (= *uneigentlich*), einen Satz zu begleiten, welcher eine Art der Steigerung bezeichnet; im Gegensatz des *Vielweniger*, welche seine Art der Verminderung bezeichnet.

とある。

いずれにしても、『三語便覧』もまだ辞書と呼ぶには抵抗感を覚えないわけにはいかない。

行の『孝和袖珍字書』とされている（鈴木重貞著『ドイツ語の伝来』ほか）。先に述べたように、市川兼恭は幕府からドイツ語の辞書の編纂の命を受けたし、また後述するように、明治政府は加藤弘之に独和辞書の編纂を依頼したのであるが、両名の努力は明治5年までには実を結ばなかったのである。

本稿ではその明治5年から約125年が経過した今日、改めて明治以来刊行された独和・和独辞典を総覧し、その発展の跡をたどってみたい。これまでもそうした試みがいくつかなされていて、この稿を起こすにあたり、貴重な参考文献として利用したそれらの先人の研究記録を下に列挙したおこう。

- 1 石本岩根「明治年間に於ける獨和及び和獨辭書に就て」。『愛書』臺灣愛書會 第一輯（昭和8年6月）、第二輯（昭和9年8月）所載。
- 2 高梨武臣「独和辞典の比較(1)(2)」。『図書館雑誌』1971 Vol. 65 No. 6～7.（昭和46年）。
- 3 田中康一「日本におけるドイツ語（学）発達のあと」。『日独文化交流の史実』1974年3月 財団法人日独協会編集・発行。36～52ページ。
- 4 上村直己「日本における独和辞書発達小史」。『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』第24号：1～14（1989）。
- 5 宮永 孝「明治初年から昭和十年代までの独和・和独辞典」。『日独文化交流史』（三修社 1993）257～263ページ。

以上は独和・和独辞典に限るものであるが、この他惣郷正明氏が、下記のような辞書に関する著述の中で、独和・和独辞典について多くの興味ある記述を行っている。

- 6 『辞典の話』東京堂出版 昭和47年

- 7 『辞書風物誌』朝日新聞社発行 昭和48年
- 8 『洋語辞書事始』日本古書通信社 昭和61年
- 9 「辞書をめぐる人びと」。『ぶっくれっと』三省堂 1985年1月号より13回連載。
- 10 『目で見ると明治の辞書』辞典協会発行 1989年

さらに辞書の辞典を二点挙げておく。

- 11 『辞書解題辞典』惣郷正明・朝倉治彦編 東京堂出版 昭和52年
- 12 『日本辞書辞典』榑おうふう 平成8年(発行予定)

ここで、これから取り上げようとする独和・和独辞典について、その範囲を明らかにしておかねばならない。まず「辞典」ないし「辞書」の概念についてであるが、辞書の定義と種類、並びに百科事典との相違については、例えばシドニー・I・ランドウの『辞書学のすべて』(Sidney I. Landau: Dictionaries: the art and craft of lexicography) (小島義郎・増田秀夫・高野嘉明訳 研究社 1988)の第一章「辞書とはなにか」に述べられているが、国により、種類により、また時代によってさまざまであり、これを一言で断じることが困難であると言えよう。最も一般常識的通念に従えば、ことばを集めて「一定の基準によって配列し、その表記法・発音・語源・意味・用法などを記した書物」(松村明[編]『大辞林』第二版 三省堂 1995)ということになるであろうか。この点では一般的な独独辞典においてもほぼ似たようなもので、例えば“Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 8 Bänden. 1993-1995”のWörterbuchの項を引いてみると、“*Nachschlagewerk, in dem die Wörter einer Sprache nach bestimmten Gesichtspunkten ausgewählt, angeordnet u. erklärt sind.*” (ある言語の単語が一定の見地から選ばれ、配



列され、解説されている参考書)と出ている。難しいことの一つは、「単語集」との境界線をどこに引くかである。そこで本稿では辞書の定義には寛大となり、単純に自己申告を重んじ、「辞典」「辞書」を名乗るもの(「字彙」「辭彙」「字書」「字典」「字林」「譯囊」「言林」など、あるいは単に「独和」とのみで「辞典」を名乗らないものまで含む)は、上述の通念から大きく外れていない限り、大小を問わず、これらをすべて取り上げるばかりか、それに筆者が「辞典」「辞書」と独断するものまでも加えることとする。こうすることで煩わしさの割りには得られる益の少ない定義の労苦を回避すると同時に、編著者の立場を尊重したいと思うからである。

次にドイツ語と日本語の二言語についてであるが、一方の言語が見出し語となり、他方の言語で解説するもの、即ち対訳の「独和」及び「和独」の辞書ということである。「独」「和」の名称に拘泥するものではないことは言うまでもない。田中梅吉氏によれば、「獨逸」の漢字が使われたのは、筑作省吾著『坤輿圖識補』(弘化3年刊——1846年)が最も早い例である(28)。『宛字外来語辞典』(柏書房 新装版 1991)から拾うと、ドイツ、ドイツランドには「獨乙」「度逸」「都逸」「和都」「徳意志」「上都逸國」「独乙都蘭度」「度逸都蘭土」、ゼルマン、ゲルマンに「日耳蔓」「日爾曼」「日耳曼列國」、ゼルマニア、ゲルマニヤに「熱爾馬泥亜」「入爾馬泥亜」「入耳馬泥亜」の漢字が使われていた。また当時ドイツ統一の主導権をとっていたプロイセン、プロシヤ、プロシヤには「孛漏生」「孛魯土」「孛魯西」「孛露西」「普漏西」「普爾西」「普魯土」「普魯西」「普魯斯」「普魯社」「普爾生」「布魯斯」の漢字が用いられた。そのため明治初期には辞書の名称には、「独」でなく、プロイセンの「孛」を使ったものがあり、また「和」の代わりに「日」としたものもある。また、見出し語は日独のどちらか一言語であっても、対訳・解説には日独のみならず、他の諸言語を加えたもの(例えば英語で、あるいはまた同一言語のドイツ語で解説する所謂「双解」)があるので、正確には日独二言語以上というべきかもしれない。

一般に「独和辞典」と呼ばれているものは、ドイツ語の単語をアルファベット順に見出しにして並べ、その意味・用法などを主として日本語で説明した書である。これに対し「和独辞典」は、日本語の見出しからそれに対応するドイツ語が引ける書である。見出しの日本語はたいていローマ字により、これを ABC 順に並べるが、初期のものには「いろは」順があり、また平仮名による五十音順の配列のものや、漢字で引けるものもある。使用のローマ字はヘボン式が多く、日本式・訓令式は少数である。「独和」も「和独」も活字にはドイツ字体 (Fraktur) とラテン字体を用いたものがあるが、第二次大戦後ドイツ字体はほぼ完全に姿を消した。権威と定評のある本国ドイツの辞典や欧米諸国の辞典 (独英・英独など) を基本・参照にして、個人もしくはグループで執筆・編集するが、特に和独辞典ではドイツ人学者が校閲その他の形で協力することが多い。「独和」の語義の記述には、ことばの歴史的発展を重視して通時的に行なうものと、現代語を中心に使用頻度順に行なうものに二大別でき、現今では後者のほうが主流となっている。ドイツを中心とする国際情勢や社会・文化の目まぐるしい変化、諸科学の発達が新語彙・新語義を生み、またドイツ語研究の進歩と利用者の需要の増大に伴い、時を経るに従って収録語彙数も次第に増加し、記述・説明も詳細多岐にわたってきた。とりわけ第二次世界大戦以後、日本語に漢字制限や送り仮名・表記法の改革問題、ドイツ語に東西二分による政治・経済体制の語義・語彙への反映や、またつい最近の正書法の改革問題があり<sup>29)</sup>、これらの処理も課題となった。

「独和」「和独」とも、初期のものは単に対応語を記すだけにとどまっていたが、次第に品詞区分から、分綴・発音・語源・語相・対応英語・語形変化・類義語・対義語・派生語・複合語・図解・用例・熟語慣用句・文法説明が加えられ、付録に動詞変化表の他、和独索引 (独和の場合)、文法表、文法用語索引、年表などの参考資料も添えられ、日常会話集など実用面も考慮され、視覚的にもレイアウトに工夫がこらされ、2色刷りになっ

てきた。他方こうした辞書の大型化と細密化傾向の反面、用途・範囲を限定し、初歩の学習者を対象にしたり、携帯の便宜を図った小型の辞書も発達し、辞典は多様化した。平成8年3月現在一般書店の店頭に並ぶ大小の「独和」辞典（収録語彙数1万語前後から15万語以上）の数は20点を越える。一方、マルチメディア時代を反映して、音声入りの電子ブック（CD-ROM）も市中に出回りはじめた。一般的に言って「独和」に比べて「和独」の需要は低く、明治以降これまでの刊行点数も「和独」は「独和」の三分の一にも満たないし、現在書店の店頭に並ぶ和独辞典も数点に過ぎない。『「外国語」の本全情報 45/94』（日外アソシエーツ 1995）によって数えると、昭和20年（1945）から平成6年（1994）までに国内で刊行された独和辞典約40点に対し、和独辞典は10点を数えるのみである。これは、日本におけるドイツ語教育が訳読中心に行なわれてきたことにも原因があるのかもしれない。

ドイツ学の必要とドイツ語教育の普及は、一般的な独和・和独辞典に飽きたらず、幅広い利用者層の目的・用途に応じたさまざまな特殊辞典や専門辞書を発達させた。語彙をある一つの専門分野に限る専門用語辞典について言えば、明治初期には独和の「兵語」辞典があったし、特に医学・法学の専門用語辞典が現在に至るまで多種刊行されたことは、日本がこれらの領域においてドイツに範を求めるところが多かったことを物語っている。その他、経済学・社会学・化学・動植物・鉱学・機械工学などの諸科学から、哲学・航空・芸術・スポーツなどの分野でも専門の日独二言語対訳辞書が刊行されてきた<sup>30</sup>。また語学学習の面でも特殊な辞典が存在するが、代表的なものと言えば、熟語辞典や文法辞典である。その他、ドイツ語の中の外来語のみを扱うもの、類義語間の相違を解説するもの、発音、固有名詞、語源、中高ドイツ語など、特殊な領域に限られた辞典が数多く存在することは、日本におけるドイツ語研究の進歩を示していると言えよう。

日独二言語対訳辞書は、日本国内においてのみ刊行されてきたわけではない。広い意味のドイツ、ドイツ語圏の国でも早くから編集が試みられたことを見逃してはならない。そのおそらく最初のものは、1851年オーストリアのヴィーンで刊行されたプフィッツマイヤーの著わした“Wörterbuch der japanischen Sprache”である。著者の August Pfitzmaier (1808-1887) は現在チェコ領の Karlovy Vary (旧ドイツ名 Karlsbad) 生まれの元調理士で、プラハで法学、さらに医学を学び、ヴィーンで医師を開業しながら日本をはじめとする東洋の言語文化を研究し、その業績によって帝室学士院会員に推薦された人物である。彼の『日本語辞典』の刊行は、残念ながら第1分冊のみで中絶したが、日本に先駆けて（1851年は嘉永4年）大がかりな和独辞典が彼地で企画・編集された事実にも驚かされる。この辞典は現物が九州大学や慶応大学に存在するが、つい最近都内で開催された古書展が機縁となって、成城大学でも入手できた。この辞典については、田中梅吉氏が『総合詳説日獨言語文化交流史大年表』（385～392ページ）で取り上げて解説している他、吉町義雄氏の「奥都創刊日本語辞書」（九州大學文學會編『文學研究』第33輯 昭和18年）という研究発表もあるが、本稿でも他の外国で編集・刊行された日独二言語対訳辞書とともに改めて考察することにしたい。

1787年ロシアの女帝カタリナ二世は *Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa*（欽定全世界国語比較字彙）の初巻を刊行し、1790年から1791年にかけてこれを改訂増補したが、その第4巻に日本語が282語採録されている。これには、日本の南部藩の漂民、その混血児、また彼らに日本語を習った者たちが協力したが、彼らの中には伊勢の漂民大黒屋光太夫もいた<sup>31)</sup>。

新村 出博士の「伊勢漂民の事蹟」には、ドイツの言語学者H. クラブ

ロート (Heinrich Julius von Klaproth)<sup>32)</sup> が、ロシアに招かれて1805年イルクーツクにやってきたが、そこで通訳を務めたり、漂流民の世話をしていた伊勢の漂流民新蔵なる者と出会い、彼から日本語を学び、日独辞書の編纂を企画したことが述べられている。少し長いが、引用すると

『亜細亜新誌』“Nouveau Journal Asiatique” 第三卷（一八二九年 文政十二年）にクラプロートの論文「日本に於ける漢字用法の入門及び日本仮名書体の起源について」と題する中に、

日本漁民の漂流してカムチャトカに着し、尋でイルクーツクに送らるゝや、カタリン女帝は之を利用して同地に航海学校を設け之に日本語学の講座を置きたり、この講座多分今（一八二九年）尚存在せるなるべし、教職にあるは常に一人の日本人にして若干の露国少年に其国語を授く、然れども学徒の其語学に通達する者甚稀なりとす、一八〇五——一八〇六年の間、予（クラプロート）の滞在中には伊勢の産新蔵その職にあり、彼改宗してコロチギン Kolotyghin と称し、洗礼を受けてニコライ・ペトロキッチ Nikolai Petrowitsch と呼べり、予其際早引節用集を得たり、予は此辞書と新蔵の補助とによりて、日本語を習へり、又予はこの辞書を抜粹して独逸語に訳せり、

と述べ、元禄十三年版の『七以呂波手本』<sup>33)</sup>、宝暦安永時代刊行の「節用集」<sup>34)</sup> も同地で見掛けたとある。『巴里国民図書館写本目録』に「Alphabets septisyllabaires セツ以呂波云々」と見え、クラプロートの筆とおぼしく「予はシベリヤに於て之を得、日本人ニコラウス・コロチキンによりて通読卒業せり、一八〇六年」とあるのは、右の以呂波手本を指す。

又クラプロート『蔵書目録』第二部（二七号乙）に、

和独辞書、クラプロート撰、イルクーツク、一八〇六年、写本、と題するは、右の「早引節用集」を抜粹し、羅馬字を以て読方を写し、独逸語で解釈した明瞭に美しく書いた本であるといふ<sup>35)</sup>。

このクラプロートの和独辞書の規模・内容などは明らかではない。渡邊修二郎氏は「明治前後日歐文學の關係(上)」(『明治文化』第六卷第二号14ページ)でこのことに言及し、「此「日獨辭書」は一八〇六年ドイツで刊行した、不十分ながらも是が兩語對譯辭書の始である」と述べているが、いずれにせよ、時代がプフィッツマイヤーの『日本語辞典』よりも半世紀前のことであるのは注目に値しよう。

## 6

徳川幕府が朝廷に政権を奉還し、明治と改元されて以降、明治5年に日本最初の本格的独和辞典が誕生するまで、辞書とまでは言えないが『官版獨逸單語篇』に続く獨逸語学習のための單語集のようなものは出版された。宮永孝氏の『日独文化人物交流史』の中からそれらを拾い、上村直己、田中梅吉、鈴木重貞、惣郷正明諸氏の上述の文献を参考にその内容を説明すれば、次の通りである。

- 1 中村順一郎譯『獨逸單語篇和解』東京書肆 萬笈閣発行 明治4年 木版 和綴じ 縦18.1cm, 横12.3cm, 厚さ1.5cm. 主として名詞と、それに対応する訳語が掲げてある。名詞は定冠詞付, 文字はドイツ字体。ドイツ語と訳語の日本語の両方にカタカナ発音がふってある。
- 2 教師類西氏閱 前田利器譯 『註解獨逸單語篇』官許 愛智館藏版 明治4年 木版 和綴じ 縦18cm, 横12cm, 厚さ0.5cm. 12ページの單語集で、乾坤・時令・人倫・器材など15部門, 約420語を収める。名詞中心で定冠詞付き, 文字は筆記体。やはり日独兩語にカタカナ発音付。因に宮永氏は校閲者を類震としているが、高橋氏の資料10.のコピーによっても、筆者の目にはそうは見えない。当時外国人の名に氏の敬称を付けるのは普通のことであったように思う。
- 3 『獨逸單語和解』(Deutsche Vokabeln Japanischen./Verbesserte

Auflage/Saikio./zum 4<sup>ten</sup> Jahre Meiji/Hanschoscha) 木版 和綴じ  
縦17.3cm, 横12cm, 厚さ0.7cm. 108ページ。名詞中心で, 文字は筆記  
体。

4 中村雄吉譯『普語箋』上下2巻 東京書林 萬笈閣梓 明治4年  
木版 和綴じ 縦18.4cm, 横12.7cm, 厚さ上1.0cm, 下0.5cm。巻之一  
(51丁)は名詞中心の単語を並べ, 巻之二(33丁)は名字, 添字, 動  
字, 俄名字および会話から構成されている。

5 『獨逸文典字類』明治4年 春風社 木版 和綴じ 縦18.0cm, 横  
11.5cm, 厚さ2.0cm. 文法用語とアルファベットを掲げた後, Aからは  
じまるドイツ語の単語が羅列されるが, 品詞と訳語がついている。文  
字はドイツ草書体, 和訳は楷書体でペン書き。88葉。語彙約2,600。ど  
の名詞にも定冠詞か不定冠詞が必ず付いている。惣郷氏によれば「小  
さいながらもわが国最初の独和辞書であった」(「辞書をめぐる人びと  
(10) 三省堂『ぶっくれっと』)。

6 『獨逸單語編』(DAS BUCH DES UNTERRICHTS) 春風社 明治  
4年 活版 縦17.3cm, 横10.3cm (田中氏によれば11.2cm), 厚さ0.5  
cm. 80ページ。ラテン字体の名詞中心の単語集で, 訳語はついてない。  
鈴木氏によれば, 編者は司馬凌海で, 語数は1490。

7 中村先生著『普英通語對譯』明治5年 木版 和綴じ 縦18cm, 横  
12.1cm, 厚さ1.0cm. 66ページ。各ページ中央に日本語を置き, その左  
に英語(英咭喇), 右にドイツ語(日耳曼)を配した語彙集。両語とも  
カタカナが振ってある。

以上はいずれも宮永氏が自身で実見されたものである。

これに田中梅吉著『総合詳説日獨言語文化交流史大年表』(492ページ)か  
ら次の1点を加えることができる。

## 8 『獨逸譯附單語篇』明治4年

田中氏によると「京都出版の珍籍」であるが、タイトルページに“Deutsche/Vokabeln/mit/Japanischen./Verbesserte Auflage./Saikio/im? Jahre Meiji/Hanschoscha”とあり、?の箇所は判読不能とのことであるが、これは宮永氏の挙げた3.と同じ書である。ページ数も108で同数。しかも宮永氏は、田中氏が?としたタイトルページの箇所も明示している。Verbesserte Auflage (改訂版)とあるからには、これに先立つ初版があることになる。高市慶雄編「外国文化関係文献年表」(『明治の文化』)には「明治四年 獨逸譯附單語篇 — 京都 汎書舎」と載っているから、宮永氏の実見したのは日本名の題名だけが違うことになる。

高橋輝和氏も研究発表『ドイツ語学習の始まり』で、1, 2, 4, 8の書を取り上げ、それらの書の系譜を論じた。氏によれば、6の書は維新後の最初の単語集であるが、『英吉利單語篇』(既述の慶応2年開成所発行のもの)をドイツ語に置きかえていて、訳語がないが、これに訳語を付けたのが8の書である。1および2の書もこれと同系である(ちなみに1は405項目を収録)。また、4の書(1592項目を記載)は、1861年刊行の『英語箋』の英語をドイツ語に替えたものであるという<sup>36)</sup>。

これらの書はいずれも日本語は縦書きになっている(つまり90度回転して印刷してある)が、4のみ日本語も横書きになっているのが注目されよう。

これらの書が明治4年(1871)に集中しているのは、明治3年(1870)の普仏戦争とプロイセンの勝利、1871年のドイツ第二帝国の成立と無関係ではない。明治政府の政策もあって、この頃から急速にドイツ語学習熱が高まっていくのである。



ドイツが普仏戦争に勝利したことは、日本におけるドイツ学の進展をいっそう促した。ドイツ語の学習者が増加する一方で、辞書の編纂は識者の急務であった。幕府からドイツ語の辞書の編纂を命じられた市川兼恭は、その命を果たさなかった。明治初年の大学南校におけるドイツ語辞書編纂の計画については、山岸光宣博士の『大學南校文書の獨逸學關係事項』に詳しく述べられている<sup>37)</sup>。それによると、明治4年に次のような辞令があった。

大學大丞加藤弘之

本官ヲ以テ字語字彙對譯專務被仰付候事

辛未三月廿七日

太政官

また同年の文書に次のものがある。

雇獨逸教師瑞西人カデルリー儀來ル十一月二十六日迄ニテ御雇期限滿御暇被下候ニ付テハ未ダ壹ヶ月ハ期限相殘居リ候得共同人ハ辭書編輯ニ相掛リ云々、

辛未十月十二日

南校

文部省御中

これらによって、加藤弘之とドイツ語教師カデルリー<sup>38)</sup>が独和辞書の編纂に従事したことがわかる。しかしなかなか進捗しなかったので、次のような対策が講じられた。

獨乙和解之辭書未ダ刊行之書一部モ無之教導差支候ニ付キ是迄獨逸教

官へ半日ヅ、課程トシテ辭書編輯申付來候末今般御改革以後ハ教官課程多ク餘力無之故昨今中絶致シ居候右ハ必用之書ニテ此儘廢棄候テハ生徒之進歩ニ障碍ヲ相生シ可申候勿論是迄譯成之分モ廢物ト相成甚遺憾之事ニ御座候就テハ爾後課程外トシテ十二行一枚譯料金二分宛ヲ以テ御買上ケ有之度左候得バ朝夕勉強必ズ出來可申候此段相伺度候也

辛未十一月五日

南校

本省

二分は50錢である。これに対して文部省は「伺之通」の許可を出したが、それでも思うようにはかどらず、南校の教官だけでなく、民間のドイツ学者にも協力を仰ぐことになった。

是迄當校ニテ獨逸辭書編成致シ候末先達而三浦祐次郎、木村繁生御寮へ相廻リ右辭書引續編輯有之候ニ付キ兼テ御相談之通り其校合等相原少助教へ申付置候處辺も兩人位ニテハ何時成効可致哉難事候間當校獨逸教官其他獨逸學者へ右辭書反譯ヲ命ジ相當之代金ニテ御買上何分一日モ早く出來候様致度趣相原ヨリ申出候至極最モ之義ニ有之候條右反譯御買上有之度尤其周旋ハ同人へ吃度可申付候此段及御相談候也

壬申三月二十五日

編輯寮御中

南校

壬申は明治5年である。相原とは相原重政少助教<sup>39)</sup>のことである。これに対する回答は次の通りであった。

日耳曼辭書編成ニ付御申越之件致承知候右ハ可成大至急成功致度候間御校官員ハ勿論其他之日耳曼學者ニテモ相原少助教推舉ニテ可然學力有之候ハ、譯稿全一枚ニ付譯料金貳分ニテ買上可申然ラバ當寮員始其

他之譯稿校合相原少助教ヨリ委任致シ校合料トシテ一枚に付金二朱  
ヅ、差出都テノ責ハ相原ニ帰シ候間御校ヨリ御下命被下度此段及御回  
答候也

壬申三月二十五日

編輯寮

南校御中

二朱は12銭5厘、かなりのあせりが窺えるが、それでも南校教官の辞書は  
ついに実現を見なかった。その間に明治5年4月京都で『和譯獨逸辭書』  
の第一分冊が刊行され、そして東京で、ついに本格的な独和辞典の第一号  
である『字和袖珍字書』が學半社から出版されたのである。

注

- 1) 惣郷正明著『洋語辞書事始』（日本古書通信社 昭和61年）57ページ。
- 2) 明治新政府による学校制度は、朝令暮改、猫の目のようにくるくる変わった。開成学校（慶応4年6月）の名称変更は以下のように推移した。  
大学南校（明治3年12月）——南校（4年7月）——第一大学区大一  
番中学（5年8月）——開成学校（6年4月）——東京開成学校（7年  
5月）——東京大学に合併（10年4月；理学部・法学部・文学部）——  
帝国大学（19年4月）——東京帝国大学（30年6月）。この間、明治4年  
9月24日南校は「一先ず閉校」され、9月26日「語学所」となり、9月  
28日その「独乙教場」に「予備校」が設けられ、11月7日にはその「予  
備校を廃し……専門校」が置かれた（東京大学百年史編集委員会編『東  
京大学百年史 資料 一』東京大学出版会 昭和59年）。
- 3) 『オイレンブルク日本遠征記 下』（中井晶夫訳 雄松堂出版 昭和44年）  
による。なお、丸山國雄著『日獨交渉史話』（日本放送出版協會 昭和16年  
112～113ページ）による原文は以下の通り。

Article XXI.

All official communications of the Prussian Diplomatic Agent or  
Consular Officers to the Japanese authorities, shall be written in the  
German language. In order, however, to facilitate the transaction of  
business, these communications will, for a period of 5 years from the  
date on which this Treaty comes in to operation, be accompanied by a

Dutch or Japanese translation.

Article XXII.

The present Treaty is drawn up fourfold in the German, Japanese, and Dutch languages. All these versions have the same meaning and intention, but the Dutch versions is to be considered as the original text of the Treaty, so that in case a different construction of the German occur, the Dutch version is to decide.

- 4) 丸山國雄著『日獨交渉史話』113～114ページ。
- 5) 同書 69～78ページ。及び池田哲郎「本邦における独逸学の創始——附日本見在蘭系独逸学書志——」（『蘭学資料研究会報告』第124号 3～8ページ）参照。なおここには、当時の日本における「ドイツ」の概念について以下の記述がある。

大体ドイツとは当時は後年の統一国家独逸ではなくネーデルランド（Nederlands）に対するホーフドイツ（Hoogduitsch）で通称ゼルマニ・プロイセン（Germanië Pruisen）として一部邦人学者に知られていたのみで、外交上は勿論接触がなく、その関係は主として蘭訳を通じた学問上からきたものであった。かの出島蘭館にはケムペルやシーボルトのように独逸人も交っていたが、彼等は蘭人と称してその独逸出身たることを秘していたから、彼等について英・仏語の場合のように直接ドイツ語を習得するなどということは到底出来なかった。（3ページ）。

- 6) 1818—1899。明治中期の砲術家。広島藩医の家に生まれ、蘭学を学び、砲術・造船を研究し、弘化元年（1844）江戸で町医者を開業したが、福井藩に抱えられて砲術師範となる。嘉永6年（1853）天文台の蕃書和解御用出役、安政3年（1856）蕃書調所教授手伝出役となり、文久3年（1863）開成所教授職としてドイツ語を教え、また安政4年（1857）には活版事業担任の命を受けて、洋字活版の創始にも貢献した。維新後は新政府に終始出仕して京都兵学校、大阪兵学寮の教授、東京兵学中の教授を務め、明治12年（1879）東京学士会院会員となった。
- 7) 原 平三「幕末の獨逸學と市川兼恭」（『史學雜誌』第五十五編 第八号 富山房 昭和19年8月 八ノ八九ページ）。
- 8) 1836—1916。但馬（兵庫県）の出石藩の兵学師範役の家に生まれ、通称幼名土代士トヨシ、長じて21歳で弘蔵と改名、実名は成之ヨシユキ、のち誠之アキユキ、さらにまた維新後は弘之とした。17歳のとき江戸に出て、最初佐久間象山の門に入り、のち坪井為春の門下生となって蘭学を学ぶ。25歳で蕃書調所教授手伝となり、初めてドイツ語を学ぶ。27歳で市川齋宮の

養女と結婚し、市川とともにわが国のドイツ語研究の始祖となった。明治10年（1877）東京大学総理、同23年（1890）帝国大学総長となった。明治38年（1905）帝国学士院長、明治40年（1907）ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世からドイツ学開拓の功績により王冠第一等勲章（Kronenorden der ersten Klasse）を贈与された（『加藤弘之自叙伝』大空社 1991による）。

山岸光宣博士は市川斎宮と加藤弘之を比較して次のように述べている。

「市川は加藤に比して遥かに優っているやうに思ふ。帝国学士院所蔵の欧文文書に、市川がその子息文吉が慶応元年露西亞へ留学するに當って、当時開成所の同僚に依頼して、送別の辭をそれぞれ得意の欧文で書いてもらったものがある。その中の独逸文のものは五つで、加藤、市川両氏の外、團 源次郎、鈴木進兵、近藤鎮三の書いたものである。團、鈴木、近藤三氏のものとは問題にならないが、加藤のものはかなりブロークンで、語尾の変化や、前置詞の格の支配など充分間違っている。これに比して市川の方はそれほど達者ではないが、文法の誤謬は比較的少ない。勿論独逸科学を咀嚼してこれを日本に紹介した点に於て、加藤は市川に比して遥かに優っている云々」（『日本に於ける獨逸語研究の沿革』『獨逸文學』第三年第三輯 東京帝國大學獨逸文學會編 昭和14年）。

この山岸博士のいうドイツ語の送別文については、原 平三の「幕末の獨逸學と市川兼恭」（注7）に紹介されている。原氏は「端的に云ってそれは獨文和譯については略々外交上の用に足りるであろうが、和文獨譯については未だしと云うべきであろう。兼恭において然り、彼に教を受けたその他の人々については、特に云うを要しない」（八ノ九八ページ）と、手厳しい見方を述べている。

なお、沼田次郎著『幕末洋学史』（刀江書院 昭和26年）によれば、幕末の洋学者には農民や下級武士の子息が多かった。彼らにとって洋学は、身分制度の厳しい封建制度の下で、立身出世の方策であった。

- 9) 下記の「独逸学の由来 文学博士 加藤弘之君述」（獨協学園百年史編纂委員会編『獨協百年』第一号第四部（1979）「学園史資料 第一集」397～399ページ）参照。

そこで独逸学を一番早くやったのは誰であるかと申すと、即ち先頃、八十二歳の高齢で長逝された市川兼恭君（当時は斎宮と呼べり）と拙者の二人である。……

（明治三二・一一・一）

独逸と云ふ国は、學術が歐羅巴で最も盛な国であると云ふ事は聞いて居る、英仏に優って居ると云ふ事は聞いて居る。決して医術許りが優つ

て居るのではない。然るに、既に英学、仏学と云ふものは開けて居るのに、独逸学が開けぬと云ふのは、不都合である。独逸から条約を結びに来た位であるから、是れから交際も盛になるだろうし、決して英仏と違ふ事はないから、独逸学と云ふものを開かなければならぬ。

然るに、今迄独逸学をやった者は一人もない、是れから吾輩二人が主になって、やったらどうであろうと云ふ事を相談した。相談はしたけれども、何分之を学ぶに誰も先生にする人がない。尤も、独逸の文法書や或は其外の書物で和蘭文と対訳したものが大分学校に在ったので、それで和蘭の書物は二人が読めるから、それと対訳したもので一つやって見やうかと云ふことで、弥々そうすることにした。それは電信を伝習した翌年<sup>\*</sup>であったでありませうが、昼間は教授が急がしいから夜中の業にして吾輩二人と、外にまだ一、二人同志の人があって、それ等と共に和蘭文と対訳した独逸の文法書や其外の書物を大分研究したです。併し、独逸の文法は和蘭の文法より余程六ヶ敷から実に骨が折れた。今は忘れて仕舞ったけれども、多分まづ一年足らずもそれをやったです。其内に、大分独逸の書物許りも読めるやうになって来たから、まだ不充分ではあったけれども、まづ学校に独逸学科と云ふものを開こうと云ふ評議で、其事を建議して、遂に其建議が採用になりて、生徒を入れやうと云ふ事になって来た。……

(明治三二・一一・一五)

\* これについては、「普魯士国から条約を結ぶ事に就いて使節を江戸に差越した事がある。其時に普魯士国王からして、幕府に電信器械を賜られた。……で市川君と私とが蕃所調所の教授であったから、蕃所調所から選ばれて、電信を伝習する事の命を受けた。……」とも述べている。

この加藤弘之の談話について、原 平三氏は「幕末の獨逸學と市川兼恭」(注7)の中で、「時間や事実に記憶違いがある。特に加藤が最初から獨逸語の學習が己と市川との相談に出た如く考へてゐるのは誤りである」

(八ノ九二)とし、兼恭の『経歴談』を引いて、兼恭が蕃書調所の頭取古賀謹一郎から「日本では未だ獨逸學をやる者がいないから、お前是非獨逸をやつて呉れ」(八ノ八八)と頼まれたのであり、「兼恭は獨逸語學習の幕命を最初に受け、のち加藤弘之等と共に研究に従事」(八ノ九三)した、との見解を述べている。参考のために確認しておく、蕃書調所に登用されたのは、市川が安政3年、加藤は市川に遅れること4年の万延元年である。

10) 原 平三「幕末の獨逸學と市川兼恭」八ノ九二ページ。

- 11) 『東京大学百年史 資料一』13ページ。
- 12) 『獨逸文學』第三年第三輯(注8)16ページ。
- 13) 原 平三「幕末の獨逸學と市川兼恭」八ノ九二ページ。
- 14) 上(注9)の加藤弘之の「獨逸学の由来」参照。また古賀十二郎著『長崎洋学史 上巻』(長崎文献社 昭和41年)113~120ページ「十三 吾邦に於ける獨逸語の研究」も参照。
- 15) 同書162~163ページ「二十二 英和对訳袖珍辞書並に薩摩字書」。
- 16) 同書165ページ。及び(注5)の池田哲郎氏の「本邦における獨逸学の創始——附日本見在蘭系獨逸学書志——」も参照。
- 17) 福井 保著『江戸幕府刊行物』(雄松堂 昭和60年)及び『江戸幕府編纂物解説編』(雄松堂 昭和58年)によれば『仏郎西単語篇』。
- 18) 惣郷正明著『洋語辞書事始』56ページ。
- 19) 『ドイツ文学』95 HERBST(日本独文学会編 1995)190ページ。
- 20) 同所。シンポジウムで配布の資料5.に福井藩主松平慶永の手記『静軒筆叢』(「春嶽公記念文庫」蔵)の一節があり、それに「ブンゼンはオ、ステンレーキノ即獨乙語を用ゆ」とある。
- 21) 大平喜間多編『松代町史 下巻』(臨川書店 初版昭和4年 復刻版昭和61年)によれば、英俊の妹心戒が松代藩主真田幸貫の嫡子豊後守幸良の侍妾となった縁故により、松代に来て町医を開業、のち藩医となった。監察日記嘉永3年12月18日の條に「其方妹心戒事若殿様御産母に付家苗字永打續有之候様曩に被召出御切米金四兩上一人下二人半御扶持被下置仍醫師被仰付候」と、藩医任命の事情が記されている。因に藩主幸貫は、天保12年(1841)幕府の老中として海防掛となった。英俊が江戸に出て蕃書調所の教授方になるについては、藩主の力添えがあったと思われる。
- 22) (注26)参照。
- 23) 1809—1867。徳川幕府の儒官。字は毅侯。江戸に生まれ、昌平黌に学び、水野忠邦に仕え、海防を論じた。
- 24) 1800頃—1866。幕末の漢学者。本名は至静、字は徳方、通称は重介、のちに柔介、号は畏堂。松代藩士の家に生まれ、江戸に出て佐藤一斎、梁川星巖の教えを受け、帰郷して松代城下で私塾「畏堂」を開く。藩内よりも外藩の子弟がその名を慕って多数従学した。「広額寛口巨眼年未だ不惑に達せずして頭髮既に禿し……宛然大儒の風があった」という。女優松井須磨子こと小林まさ子は父の生家の出身(『松代町史 下巻』(注21)、及び神津良子編『長野県歴史人物大事典』(郷土出版社 1989)による)。

また、關 儀一郎・關 義直編『近世漢學者傳記著作大事典』(琳琅閣書

店 昭和18年)に次の記載がある。

小林畏堂(程朱學)名は至静、字は徳方、通稱は重介、後ち柔介と改む、畏堂は其號なり。信濃の人。初め業を竹内錫命に受け、後ち佐藤一齋の門に學ぶ。業成つて松代藩に仕へて文學たり。從遊者頗る多し。年六十餘歳にて没す。後年の女優松井須磨子(小林まさ子)は其の血縁者なり。

- 25) 沼田次郎著『幕末洋学史』(刀江書院 昭和26年)によれば、幕府は海防充実のため洋学の採用に熱心であった。それに倣つて、諸藩(松代・越前・水戸・佐賀・長門・薩摩)でも、洋学の研究の氣運が高まったが、それもすべて西洋式兵学と医術知識の採り入れが主たる目的であった(146~174ページ)。
- 26) 『書物展望』第十一卷第三号(書物展望社 昭和16年)192~210ページ。なおここに引用(209~210ページ)の英俊に対する昭和5年の贈位の請願書から、佐久間象山こと脩理が英俊にフランス語を勧めた事情が窺える。

……脩理ハ歐洲ノ強國英佛獨伊蘭ノ五國語ハ果然學バザル可ラザルヲ主唱シ五國對譯字典ヲ著サンコトヲ謀リ先ヅ佛學研究ヲ右英俊に勧誘セリ英俊モ亦大ニ之ニ共鳴シテ其事ヲ遂ゲントタリ然ルニ當時我が邦ニ在テ佛學ヲ知ルモノ一人モ之レナシ乃チ英俊ガ就テ學ブベキ師ナシ英俊ノ剛毅其志ヲ屈セバ更ニ蘭人「ズーフ、ハルマ」\*所著蘭佛對譯字書ヲ購求シ佛字蘭譯ノ字書ニ就テ一字一字譯記シ他年終ニ日佛對譯辭書ヲ編成スルニ至レリ英俊當時ノ苦心思半バニ過グル所アリ彼レ身命ヲ賭シテ國恩ニ報セントシ朝ハ鷄鳴ニ起キ夜ハ三四更ニ達セズバ寝ネズ見ル者感服セザルハ無カリシト云フ……

\* 長崎のオランダ商館長 Hendrik Doeff が, François Halma : *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*, 1708 (蘭佛辞典)を底本として企てた蘭日辞書。彼は草稿だけを残して日本を去ったが、幕府が和蘭通詞を動員して天保4年(1833)に完成させた。『ズーフ波留間』『長崎ハルマ』などと呼ばれ、各地の蘭学塾に写し伝えられた。同じハルマの蘭佛辞典を底本として、江戸の蘭学者稲村三伯が白河藩の和蘭通詞石井恒右衛門らと協力して作った本邦最初の蘭和辞書『波留間和解』(27卷 2187丁)は寛政8年(1796)に完成していた。

- 27) 高市慶雄「外国文化関係文献年表」(『明治文化全集 第7巻 外国文化篇』日本評論社 昭和3年)に「明治十五年 佛英獨三國會話 一 村上英俊 達理堂」の記載あり。



- 28) 田中梅吉著『総合詳説日獨言語文化交流史大年表』370ページ。
- 29) 二十世紀に入ってからのドイツ語の正書法の改革は、1901年にベルリンで開催された「六月会議」で、1876年制定のプットカーマー正書法 (Puttkamersche Rechtschreibung) を一部修正して以来、久しく行われなかったが、1994年10月ドイツ・オーストリア・スイスの学者がウィーンで会合し、発表した改革案を受けて、これを一部修正した新正書法が1998年8月1日より実施されることに決定している。ただし、2005年7月31日までは移行期間として新旧両正書法が並行して認められることになっている。これが日本におけ独和・和独辞典やドイツ語教育に及ぼす影響が注目される。
- 30) 化学辞書を例にとった専門辞書についての論文がある。佐藤隆司・杉本昌彦「わが国における専門辞書の成立と発展——化学辞書を例に」(『出版研究』23巻 1992 49～82ページ)。
- 分野別の専門辞書の中には、はじめから大手の出版社に頼らず、採算を度外視して自力で刊行に踏み切った、ささやかながら良心的な辞書もある。例えば最近も次のようなミニ辞典が刊行された。渡水久雄編『ビオトープポケット独和小辞典』(Deutsch-Japanisches Wörterbuch für Renaturierung) 駿河台ドイツ語工房発行 1995年。(A7判 59ページ)
- 31) 『長崎洋学史 上巻』176～177ページ。
- 32) 1783—1835。ベルリン生まれの東洋学者・学術旅行家。1812年までロシア宮廷に仕え、1816年パリ大学に招聘されアジア言語・文学教授となった。
- 33) 「七以呂波」とは、片仮名、平仮名、万葉仮名など、七種の書体のいろは仮名のごとで、手習いの手本に用いられた。明暦3年版、寛文2年版など、さまざまな「七ついろは」「七ツ以呂波」本が出ている。
- 34) 『節用集』は室町時代1474年頃成立した国語辞書で、日常語彙や古典語を頭音によって「いろは」順に並べ、それを天地・時節・器物などの部門別にした実用的な家庭百科。江戸時代に種々改編増補され、内容・体裁を異にしたものが現れた。元禄時代からは、江戸や京都の地図・手紙の書式・応急手当法などの付録もついた。
- 35) 「続南蠻広記抄」。『新村 出全集 第六巻』(筑摩書房 昭和48年) 316～317ページ。
- 36) 『ドイツ文学』95。191ページ。
- 37) 山岸光宣「大學南校文書の獨逸學關係事項」。『書物展望』第九巻第五号(書物展望社 昭和14年) 385～386ページ。
- 38) Jacob Kaderly. 大学南校における最初のドイツ語外国人教師で、明治3年1月24日から明治4年11月26日まで在職した(『東京大学百年史 資料三

昭和16年』の「外国人教師・講師」の項による)。彼が作った南校発行のドイツ語教科書の翻刻をめぐって文部省と外務省が取り交わした文書を山岸博士は続いて記している。

田中梅吉氏によれば、カーダーリーは、すでに開成学校時代に來任しているとのこと。彼の作った教科書“Lehrbuch/der deutschen Sprache/für/die höhern Classen der Kaiserlich-japanischen Akademie/DAIGAKU NANKO/Tokio in Japan.”は1870年に刊行された(『総合詳説日獨言語文化交流史大年表』480ページ)。

- 39) 『日本史総覧 補卷 III 近世四・近代二』(新人物往來社 昭和61年)所載の「校訂明治官員録」明治5年の文部省の部を見ると「少助教」の中に相原重政の名がある。また、『獨協百年』第一号 第四部 学園史資料——第一集——の資料6によると、独逸学協会本会員姓名表の筆頭(番号一)に「相原重政 住所 京橋区築地二丁目廿七番地」が載っているが、その身分の欄は空欄である。丸山國雄著『日獨交渉史話』には、南校における独逸学教授時間割が掲げられているが(122ページ)、その「獨二ノ部」の教官に、相原少助教の名が見える。

なお、明治4年8月10日に改定された文部省官制等級は下記の通り(『東京大学百年史 資料 一』321~322ページ)。

一等	卿	二等	大輔大博士	三等	少輔中博士
四等	大丞少博士	五等	少丞大教授	六等	中教授
七等	少教授	八等	大録大助教	九等	権大録中助教
十等	中録少助教	十一等	権中録	十二等	少録
十三等	権少録				

明治5年9月3日には、少博士以下の大中小学教官の称号は「大教授、中教授、少教授、大助教、中助教、少助教」と定められた。

## あとがき

本原稿は平成六・七年度成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。

『三語便覧』の「引」「序」の漢文の解説については、書家の小幡太清氏より教示を受けた。また村上英俊と小林畏堂の伝記については、長野市の松代藩文化施設管理事務所の藤森さゆり学芸員より資料を提供いただいた。両氏の御好意に深い感謝の意を表する。